


サムライ・平和 第20号 立ち読み

12聖徒による福音書

加藤 明



『12聖徒による福音書』

翻訳・著述家（ウィーガン）

加藤明

絵 熊谷直人

〈始め〉

今回は、ギデオン・ジャスパール・リチャード・ウーズリー師 (Rev. Gideon Jasper Richard Useley 1835~1906) が、アラム語から英訳したと伝えられる『The Gospel of the Holy Twelve (『12聖徒による福音書 別称：完全円満なる生命の福音書』) を、冒頭5章分だけになりますが、紹介致します。筆者が、8年ほど前にはほぼ全訳し、重要語句などに解説を施したものであります。



ギデオン・ジャスパール・リチャード・ウーズリー師

マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4人によって書かれたと言われる、4つの、いわゆる「正典福音書」には、イエスの言葉と行為とが正しく書かれている、と信じられてきました。が、実はそうではない、それらの福音書には、イエス本来の重要な教えが反映していない、というところで紹介されたのが、本書『12聖徒による福音書』であります。この福音書にはイエスの元々の教えが記されており、原始キリスト教の人々はこの教えを守って生活していた、と伝えられておりますが、本書全編にみまぎっているのは、人に対してばかりではない、「生きとし生けるものに対する愛」の教えであります。

ウーズリー師は、1835年、イギリス人を父としてリスボンに生まれました。7年後、父が死去した後はアイルランドで少年期・青年期を送り、26歳でイギリス国教会の牧師として叙階されましたが、次第に違和感を強くし、およそ9年後の35歳の時に、「カトリック使徒教会」の司祭となりました。(カトリック使徒教会は、その大半をカトリック教会の教義に基づいて発足した宗派で

『12 聖徒による福音書』

すが、基本的に、バチカンに本拠地を置くカトリック教会とは別の組織です。その後、神や生命について理解を深めた彼は、1881年、46歳の時に、独自に、「種々の名前や形体はあっても、一つの神、一つの宗教」を motto にした、「帰一修道会 (Order of At-one-ment)」を創設しました。その目的とするところは、人それぞれの魂に内在するキリスト霊によって、対立する考え・物事・人々・体制に和解をもたらすこと、人間性を神性とし、人を神と一つにする、ことでありました。1901年に、『12 聖徒による福音書』を初めて公に紹介したのも、その目的完遂の一貫としてであったのであります。

彼は本書について、次のように言っています。『完全円満なる生命の福音書』は、イエスを師と仰ぐ一弟子 (訳注・ウーズリー師本人) によって、1892年、アラム語原書から英訳され編集されたものであり、キリストの教えを伝える最古にして最も完全な遺稿が日の目を見たものである。この遺稿は、チベットに存在する一仏教僧院に保存されていた。エッセネ派のある人々が、改竄者たちの手からキリストの真の教えを安全に守るた

めに、そこに隠したからである。今初めてそれが、アラム語から英訳されたのである。その内容は、明らかに、初期のエッセネ派の書きものであることを示している。エッセネ派は古代ユダヤ教会の一派で、イエセネ、レッセネ、ナザレト、ナジールなどと呼ばれていた。その教えは、ヘレニズム期にアレキサンドリアに伝播していた『セラピュータイ』と呼ばれる宗派や、仏教徒たち、のものに近似している。彼らは善行に励み、日々沐浴と礼拝をし、肉食・飲酒・動物の生け贄をしなかった。また、パリサイ派やサドカイ派の人々によっても受容されていた、身代わりとなって苦しむ者による、贖罪の教義を信奉していた」。

また、ウーズリー師は次のような言葉を残しています。「貧困や、不健康や、社会の惨状の直接の原因は、肉食・飲酒・喫煙にある」「人々や動物たちのどっちに關してであれ、世界改善の有効な手段は、唯一、肉食・飲酒・喫煙の全廃にある」「人にとって真に適切な食物は、我が子らの養育のために、母なる大地が豊かに実らせるものである」。

私が『12聖徒による福音書』と出会ったいきさつについては、いずれ機会を見てお話しするつもりでいますが、今はただ、「本書には、イエスの教えの神髄とは何か、私が年経る毎に確信しつつあった事柄が、そのものずばり明言されており、初読の際、かつてない感動を覚えた」ことだけを、お伝えしておきましょう。

尚、イエスの教えが改竄された経緯については、本文の後半、「付記：イエスの教えの改竄について」で解説してありますので、そちらをご覧ください。

〈邦訳に際して留意した点〉

以下に邦訳の際に留意した点など、読者の皆さんにも、あらかじめ知っておいて頂きたいことを、書き記すことに致します。

1 本書は、冒頭の短い、〈全一なる神の御名みなによって〉で始まり、次いで〈序のことば〉と続き、その後、1章〜96章に亘る本文が続きます。

2 「訳注」は、ごく簡単な短いものは、当該の語句の直後に、(訳注：)として、その括弧内に訳注を記しました。訳注がやや長くなるものは太字の【訳注】として、一連の文章の後に記入しました。【訳注】の中でも特に重要と思われるもの、長文になるものには、【訳注1 本書が「動物」「肉」「酒」と言う場合の具体的な意味】のように、太字で訳注番号と表題を付けました。訳注の大半は、筆者が独自に靈感を受けて記した啓示的なものなので、啓示者の威厳を保つべく、断定的表現のままとしています。

3 「第1章 洗礼者ヨハネの家柄と彼の受胎」のように、章番号の後に、その章全体の主要内容を表す表題(大見出し)が付いています。また、各章の本文では、〈ザカリアスとエリサベツ〉のように、これは元々の英語原書にはないものですが、各々段落の主題を、へ〜で小見出しを付けることによって、内容把握の利便を図りました。

4 元々英語原書で大文字となっているもの(一般人の

名前を除く)や、神の性質を表す最重要語句は、太字にしてあります。(例:「神」「聖霊」「イエス」「キリスト」「神の国」「神の家」「生命」「真理」「愛」「自分が人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。また、自分が人にしてほしくないと思うことは、人にもしなさい」など)

5 注釈に際しては、「神は一つであり、真理は一つである」との立場から、また、「宗教的偏狭から自由になつてもらいたい」との願いから、一般に流布しているキリスト教的な表現に拘ることなく、仏教的な表現なども折々に引用して解説しています。(例:「神の国」「天国」を表す際、「極楽浄土」を併用している場合など)

12 聖徒による福音書

(別称:完全円満なる生命の福音書)

〈全一なる神の御名みなによつて〉

これより、肉的にはヨセフとマリアの結婚によるダビデの子孫であり、霊的には神の知恵と神の愛の結婚による神の子である、キリストなるイエス・マリアによる、完全円満なる神の生命を実現する教え、を書き記す。

〈序のことば〉

1 世々代々、永遠不滅なる神の思念があり、神の思念は神の言葉となり、神の言葉は神の現象となる。

2 そして、これら神の思念・言葉・現象の三位なるものは永遠不滅なる法則に於いて一体であり、法則は神と共にあり、法則は神より生じるのである。